

66cmを測る。主軸はN20°Eを向く。断面は逆台形状またはU字状で、底面は北に向けて下がる。埋土は4層で、いずれも砂性が強くしまりは弱い。

全体的に礫の出土が多い。中央付近には30cm前後の礫が集中。東側のラインが直線的ではあるが、面を合わせて組んだ形跡はない。礫のなかに861の石臼を含む。北端部では遺構西側に礫が集中。長さ約80cmの大型礫を据え、崩落やズレがみられるものの東面を揃えた石組みが約2.5mにわたって確認できる。用いられる礫は40cm前後で扁平なものが多く、小口を外方に向けて列べる。溝の中央から東側にかけて崩落したとみられる礫が散在し、この中に862の石臼を含む。

遺物は土師器片、土師質土器煮炊具・焙烙、近世陶器皿・碗・甕、鉄釘、鉄鏝、砂岩製石臼が出土。

854・855は瀬戸美濃系陶器の五弁花皿。口縁端部をつまみ上げ、五弁花状に作る。底部内面に草花文を型打ち。底部内外面に最大3カ所の胎土目痕を残す。856は肥前系陶器皿の下半部。畳付に胎土目1カ所、底部内面に胎土目2カ所を残す。16世紀末～17世紀代か。857は肥前系の陶器碗。857はページの釉に白泥による刷毛目を施す。17世紀後半頃か。858は京焼系の陶器碗。畳付に離れ砂付着。釉に細かい貫入を伴う。

859・860は鉄釘。861・862は砂岩製石臼。861は下臼で、中心に芯棒受け孔が貫通。上面は凸面状で使用により磨耗。8分画で副溝3条の溝目をもつ。862は上臼で、偏った位置に供給孔が貫通、下面は凹面状で、中央に芯棒受け孔を有する。溝目は6～7分画副溝5条を確認。側面に横打ち込み孔1カ所。

遺構の年代は、出土遺物から概ね17世紀後半と考えられる。

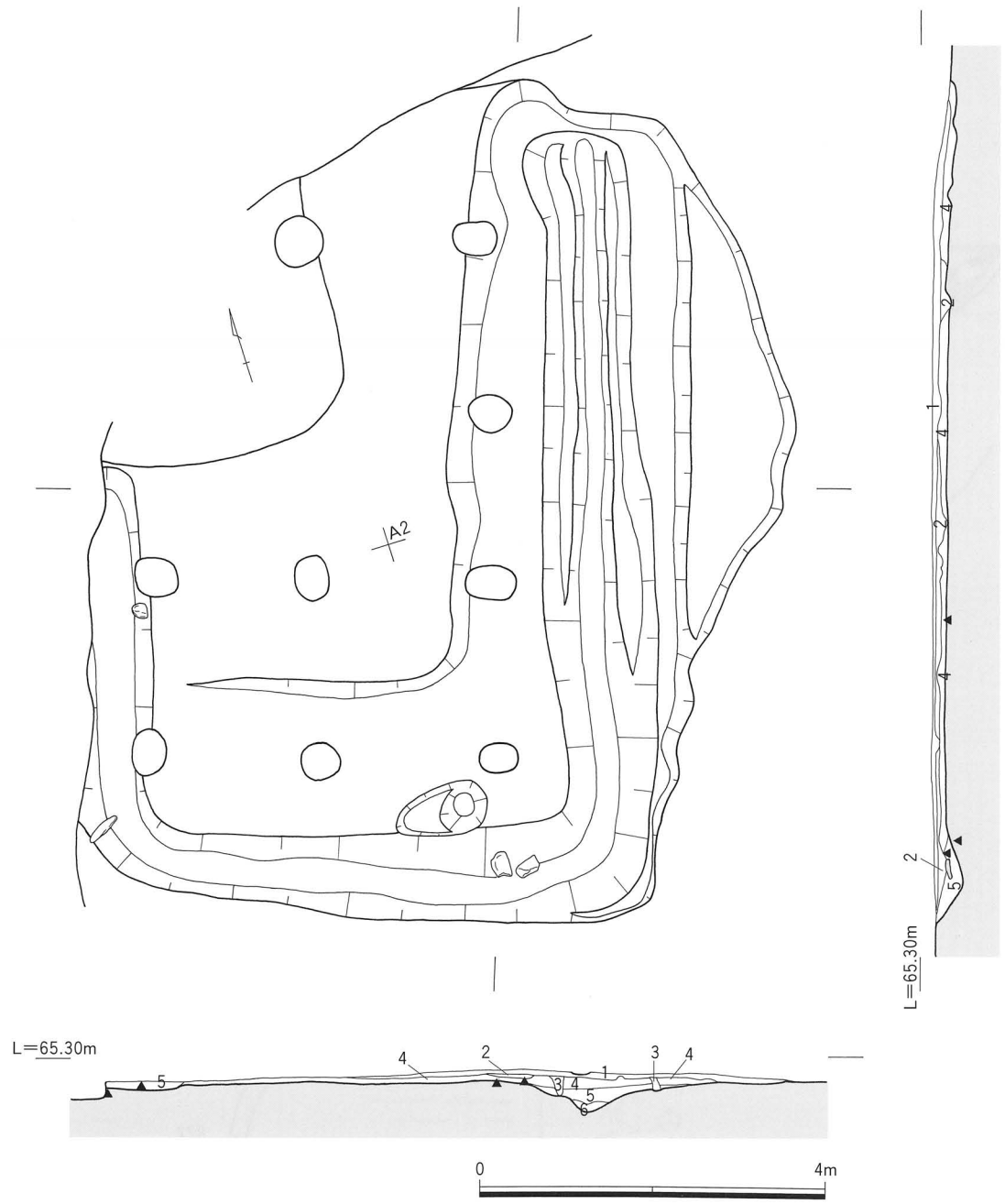
不明遺構1号(Ⅲ地区 SX1001) (第514・515図)

Ⅲ-3区中央部北側、T・A1・2グリッドに位置し、西はSD1131に切られ、北の一部はSD1132が切る。東西残存長784cm南北968cmのL字状に拡がる焼土の範囲をSX1001とした。厚みは約4～8cmあり、これを除去すると遺構縁辺の東側・南側から西側中途まで回る周溝状遺構を検出した。周溝状遺構は幅35～65cm、検出面からの深度26cmを測る。断面はレンズ状を呈する。SX1001全体の埋土は6層に分層できる。すべての層で焼土の出土が認められるが、とくに第1・4層に多く含む。

SX1001は掘立柱建物SA1004と平面的に重なる。周溝状遺構はSA1004の雨落ち部分になるため、SA1004と関連する施設と考えられる。SA1004の各EPでは、柱痕部分にのみ焼土ブロックを多量に含み、周囲の埋土には焼土・炭化物ともほとんど含まない。従ってSX1001で検出した焼土は、SA1004の焼失によって堆積したものと考えられる。また周溝状遺構の埋土に焼土粒が含まれることから、建物焼失時に機能していたものと推測できる。

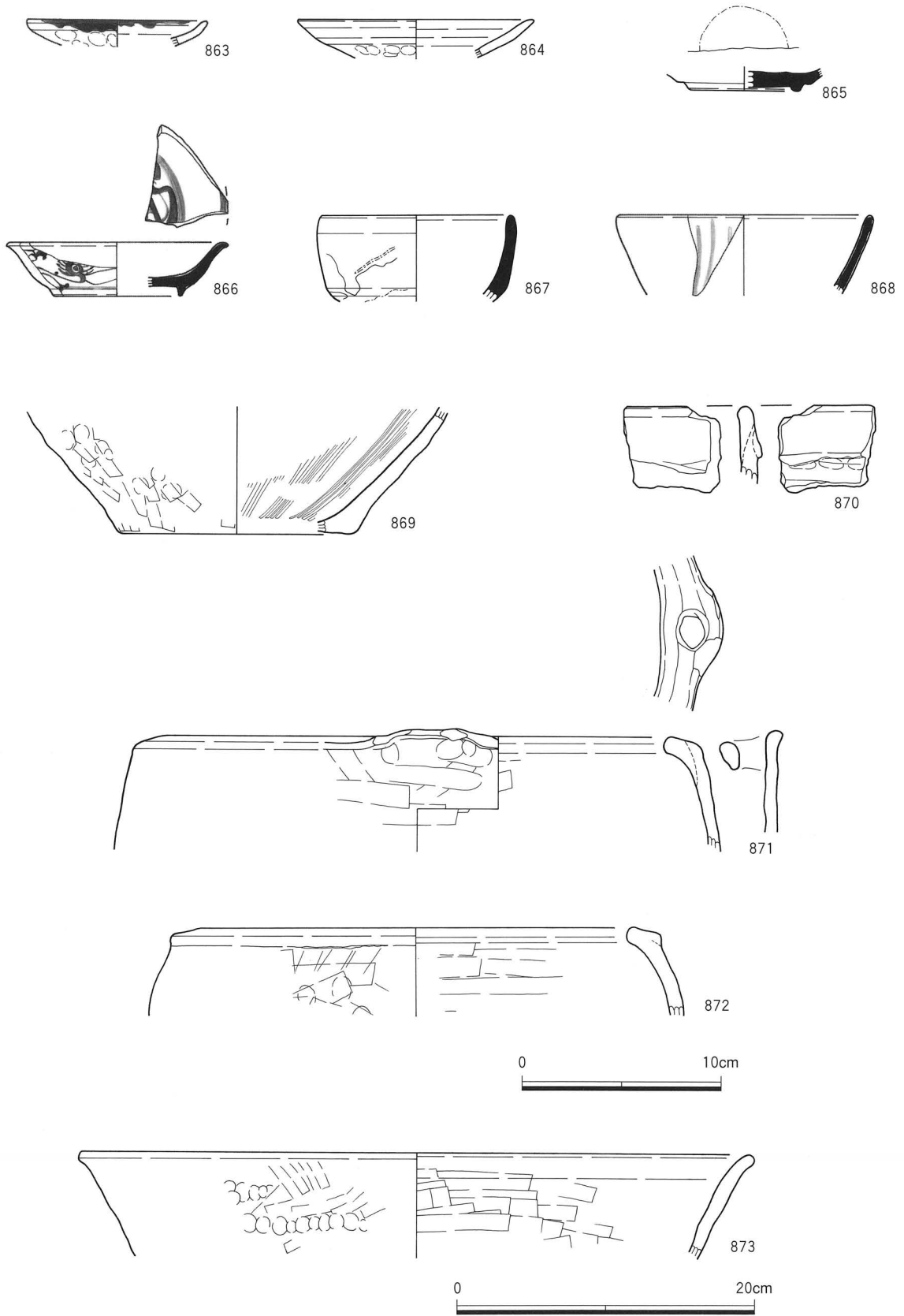
遺物は須恵器杯・甕・壺、土師質土器杯・皿・播鉢・煮炊具・鍋・羽釜(内耳・東予型ほか)・灯明皿、近世陶器皿・碗、備前壺、染付皿、青磁碗、鉄製品片、鉄釘、鉄滓が出土。

863・864は非回転台成形の土師質土器皿。口縁端部は尖らせ気味に作る。底部外面に指頭圧痕を残し、口縁から内面にかけてヨコナデで作る。863は口縁内外面に煤やタールが付着していることから灯明皿として使用。ともに京都系土師器皿で、在地での模倣生産品である。865は瀬戸美濃系陶器灰釉皿の底部。底部内面は円形に釉剥ぎし、重焼痕を残す。866は染付皿。底部内面に玉取獅子とみられる文様、体部外面に牡丹唐草文を呉須絵付けする。釉に濁りなく、発色良好。畳付部は露胎。小野分類染付皿B₁群Ⅶ類に相当し、15世紀後半～16世紀前半の年代が与えられる。867は肥前系の陶器碗。詳細時期不詳。868は青磁碗。体部外面にヘラ描きによる細蓮弁文を施文する。剣頭は省略する。釉に貫入を伴う。上



- | | |
|--|---|
| <p>1. 褐色10YR4/4砂質土（しまり弱）焼土層
焼土ブロック多く含む
灰オリーブ色砂質土ブロック含む</p> <p>2. オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土（しまり弱）
焼土粒わずかに含む
灰オリーブ色砂質土ブロック含む</p> <p>3. オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土（しまり弱）
焼土粒含む</p> | <p>4. 褐色10YR4/4砂質土（しまり弱）焼土層
焼土ブロック多く含む
灰オリーブ色砂質土ブロック含む</p> <p>5. 褐色10YR4/4砂質土（しまり弱）焼土層
焼土粒含む</p> <p>6. オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土（しまり強）
灰オリーブ色砂質土ブロック含む
焼土粒わずかに含む</p> |
|--|---|

第514図 III地区SX1001遺構実測図



第515图 Ⅲ地区SX1001遺物実測図

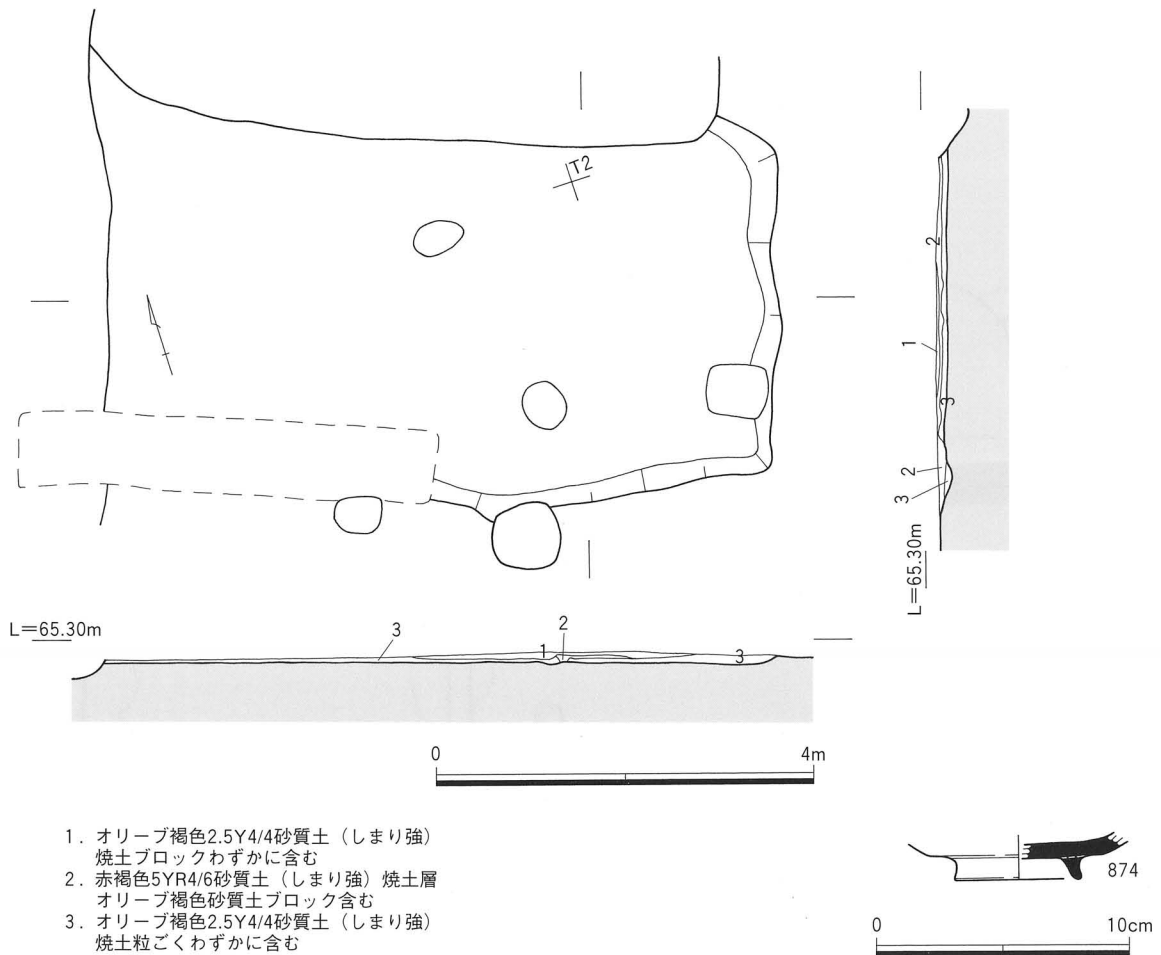
田分類のB-IV'類に相当し、16世紀代の年代が与えられる。

869は土師質土器播鉢の下半部。体部外面にユビオサエのち板ナデ、内面磨耗により不明瞭であるが横位の板ナデのち播目を施す。底部外面に煤付着。870~872は土師質土器羽釜。870は東予型羽釜の上部片。直立した体部の外面に低い凸帯状の鏝部を貼り付ける。871は鏝部が退化し、口縁・体部間の屈曲部としてわずかに残る。鏝と口縁の間に焼成前穿孔を施し、その外側を外上方に拡張して耳部を作る。口縁は大きく内傾する。872は鏝部が短く退化し、口縁とともに折り曲げ技法で作る。播鉢や羽釜は概ね16世紀代と考えられる。873は土師質土器鍋。外面に指頭圧痕のち板ナデ、内面は横位の板ナデを施す。底部を欠くが、焙烙状の器形を有するとみられる。

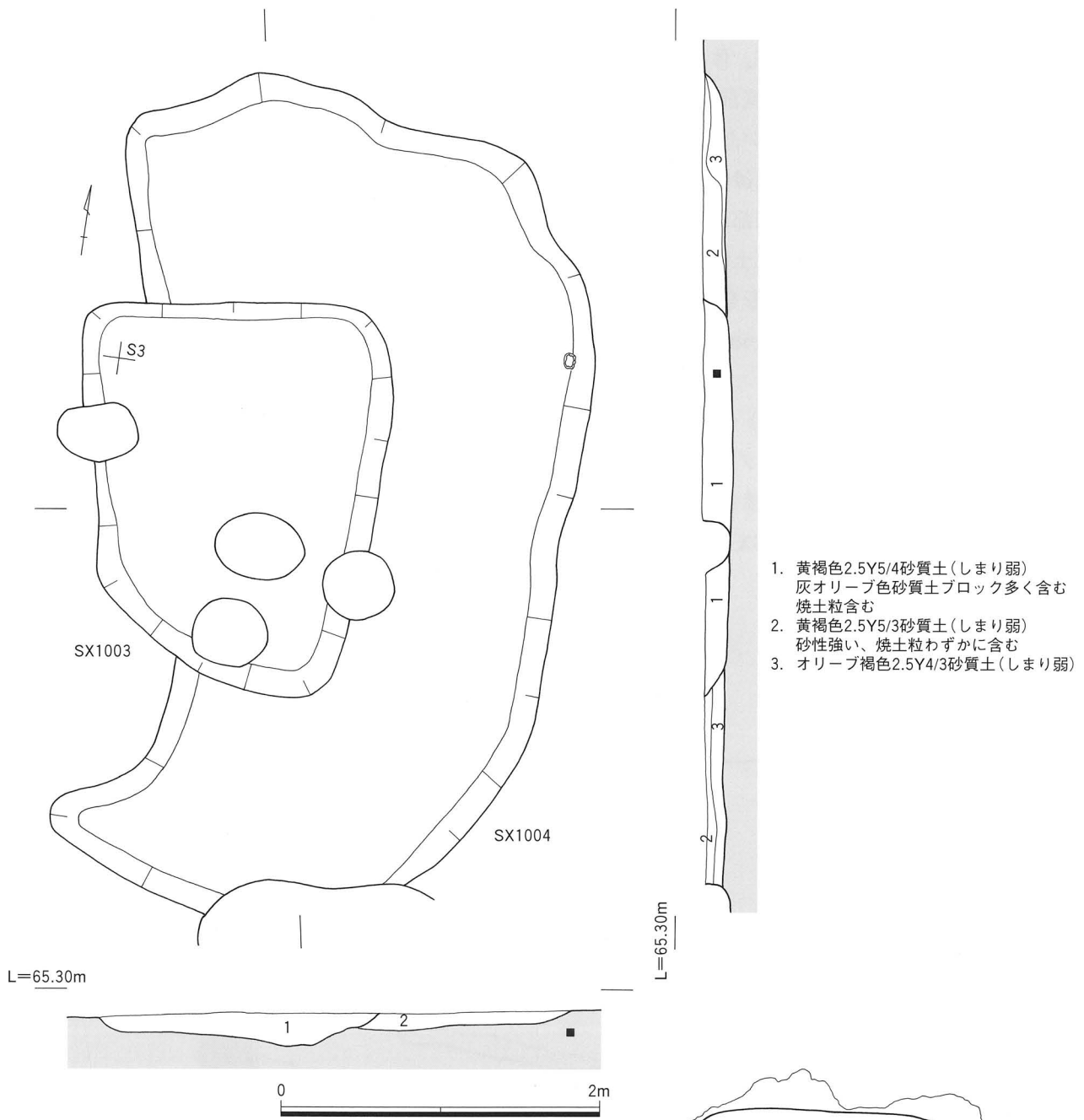
遺構の年代は、出土遺物から16世紀代に開始し近世初頭に廃絶したと考えられる。

不明遺構 2号 (Ⅲ地区 SX1002) (第516図)

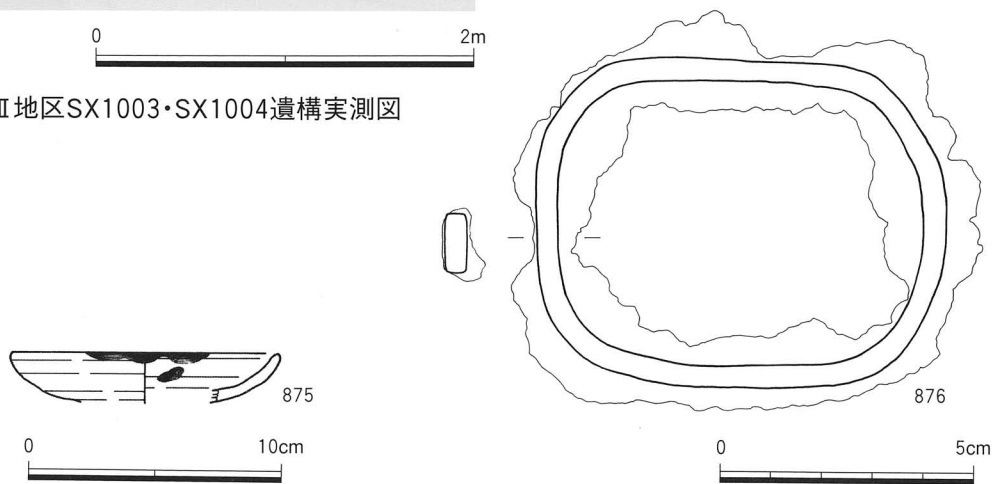
Ⅲ-3区中央部、S・T1・2グリッドに位置し、西はSD1131に切られ、北はSX1001に接する。東西残存長704cm南北残存長404cm深さ16cmを測る、不整な長方形を呈する、焼土ブロックを含む土層の範囲である。埋土は2層に分層。SX1001の一部である可能性もある。



第516図 Ⅲ地区SX1002遺構・遺物実測図



第517図 Ⅲ地区SX1003・SX1004遺構実測図

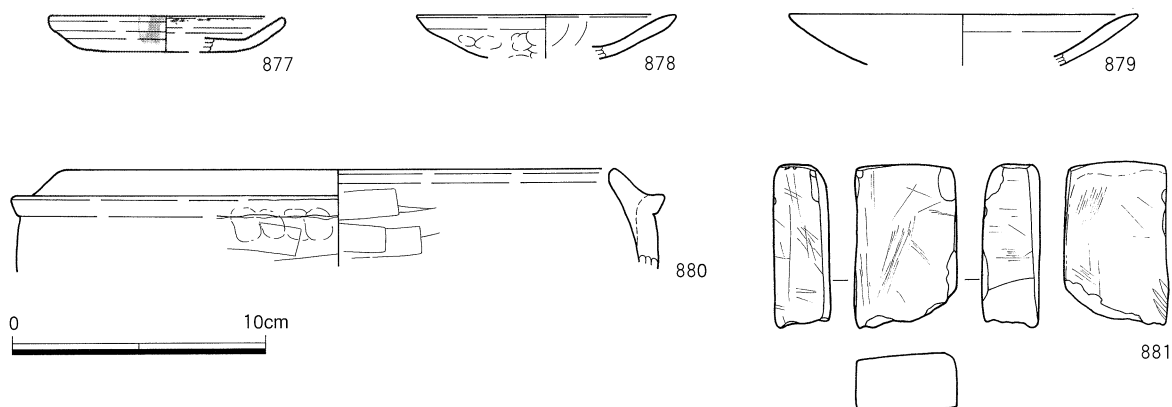


第518図 Ⅲ地区SX1004遺物実測図



- | | |
|--|---------------------------------------|
| 1. 暗灰黄色2.5Y5/2砂質土 (しまり弱) | 3. 灰オリーブ色5Y5/2砂質土 (しまり強)
炭化物細片多く含む |
| 2. 灰オリーブ色5Y5/2砂質土 (しまり弱)
砂性強い、焼土ブロックごとくわずかに含む | 4. 灰オリーブ色5Y5/3砂質土 (しまり弱) |

第519図 Ⅲ地区SX1005遺構実測図



第520図 Ⅲ地区SX1005遺物実測図

遺物は土師質土器杯・煮炊具・羽釜・鍋、須恵質土器捏鉢・椀、鉄釘が出土。874は西村系の須恵質土器椀。底部外面にやや細めの高い高台を貼り付け。軟質焼成品である。

不明遺構 3・4号（Ⅲ地区 SX1003・1004）（第517・518図）

Ⅲ-3区東部中央、R・S2・3グリッドに位置し、SX1003がSX1004を切る。ともにSA1007に切られる。

SX1003は長軸280cm短軸230cm深さ22cmを測る不整な隅丸方形の浅い落ち込み。断面は逆台形状で、埋土は1層である。遺物は土師質土器片、骨片が出土。

SX1004は長軸528cm短軸278cm深さ22cmを測る不整形の浅い落ち込み。断面は浅い皿状で、埋土は2層に分層できる。

遺物は須恵器片、土師質土器片・杯・播鉢・煮炊具(脚部・格子タタキほか)・灯明皿、備前陶器甕、鉄製品片・環状鉄製品・鉄釘が出土。875は回転台成形の土師質土器灯明皿。口縁にタールが付着。876は環状鉄製品。用途不明。断面方形で、継目は確認できない。遺構の年代概ね中世末期と考えられる。

不明遺構 5号（Ⅲ地区 SX1005）（第519・520図）

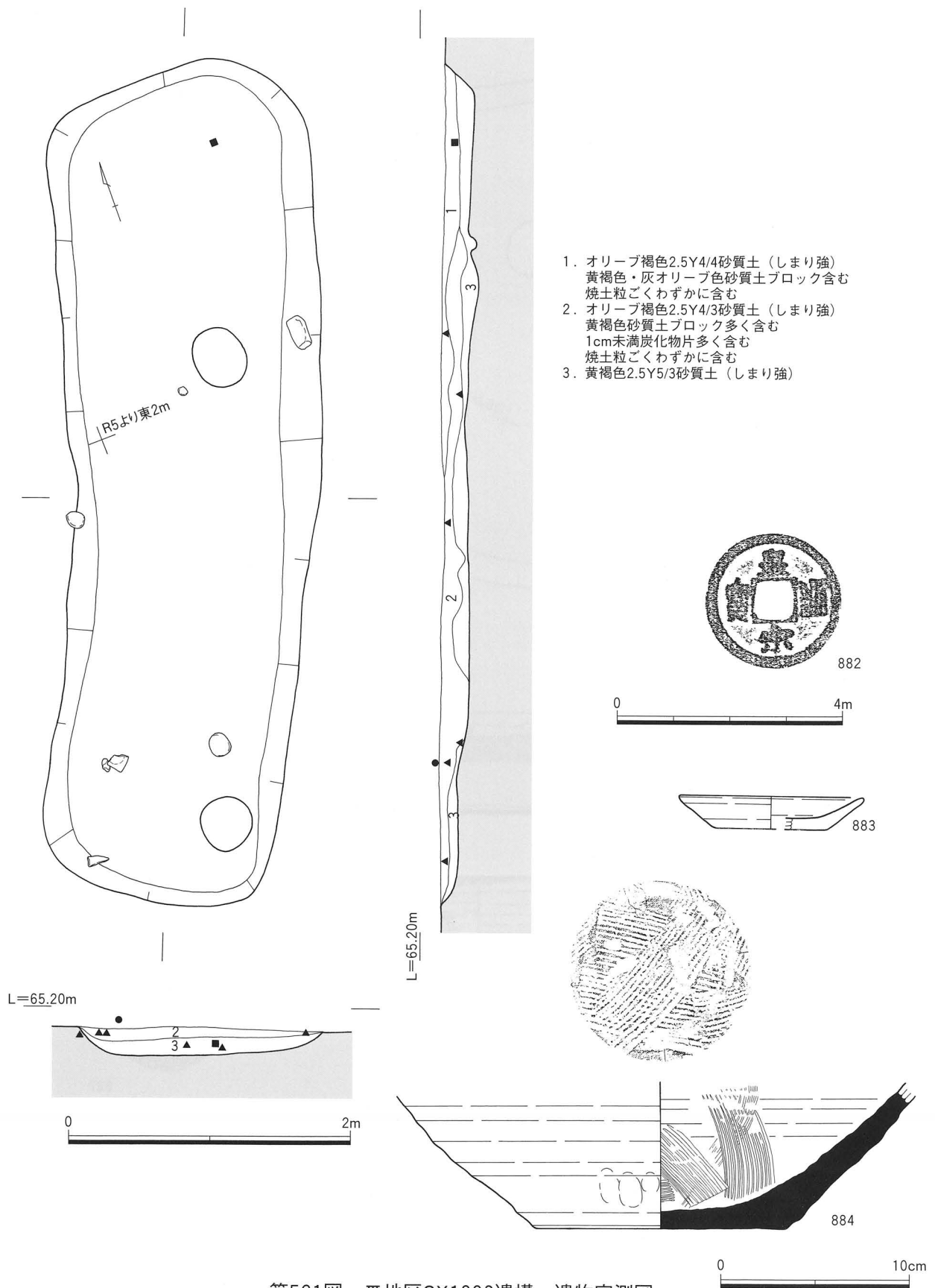
Ⅲ-3区東部中央、Q・R4・5グリッドに位置する、長軸598cm短軸340cm深さ16cmを測る不整形の浅い落ち込み。断面は浅い皿状で、埋土は4層に分層できる。SA1007に切られる。

遺物は土師質土器片・杯・皿・羽釜、須恵質土器椀、鉄滓、凝灰岩製砥石が出土。877は回転台成形の土師質土器灯明皿。口縁内外面に煤が付着する。底部外面は回転ヘラ切り痕をナデ消す。878・879は非回転台成形の土師質土器皿で、878は体部外面に指頭圧痕を残す。879は指頭圧痕が不明瞭。口縁はわずかに肥厚し、端部を尖らせる。ともに京都系土師器皿で、在地生産の模倣品。880は土師質土器羽釜。鏝部は折り曲げ技法で作る。口縁はやや高い。15世紀代か。881は凝灰岩製砥石で4面を使用。

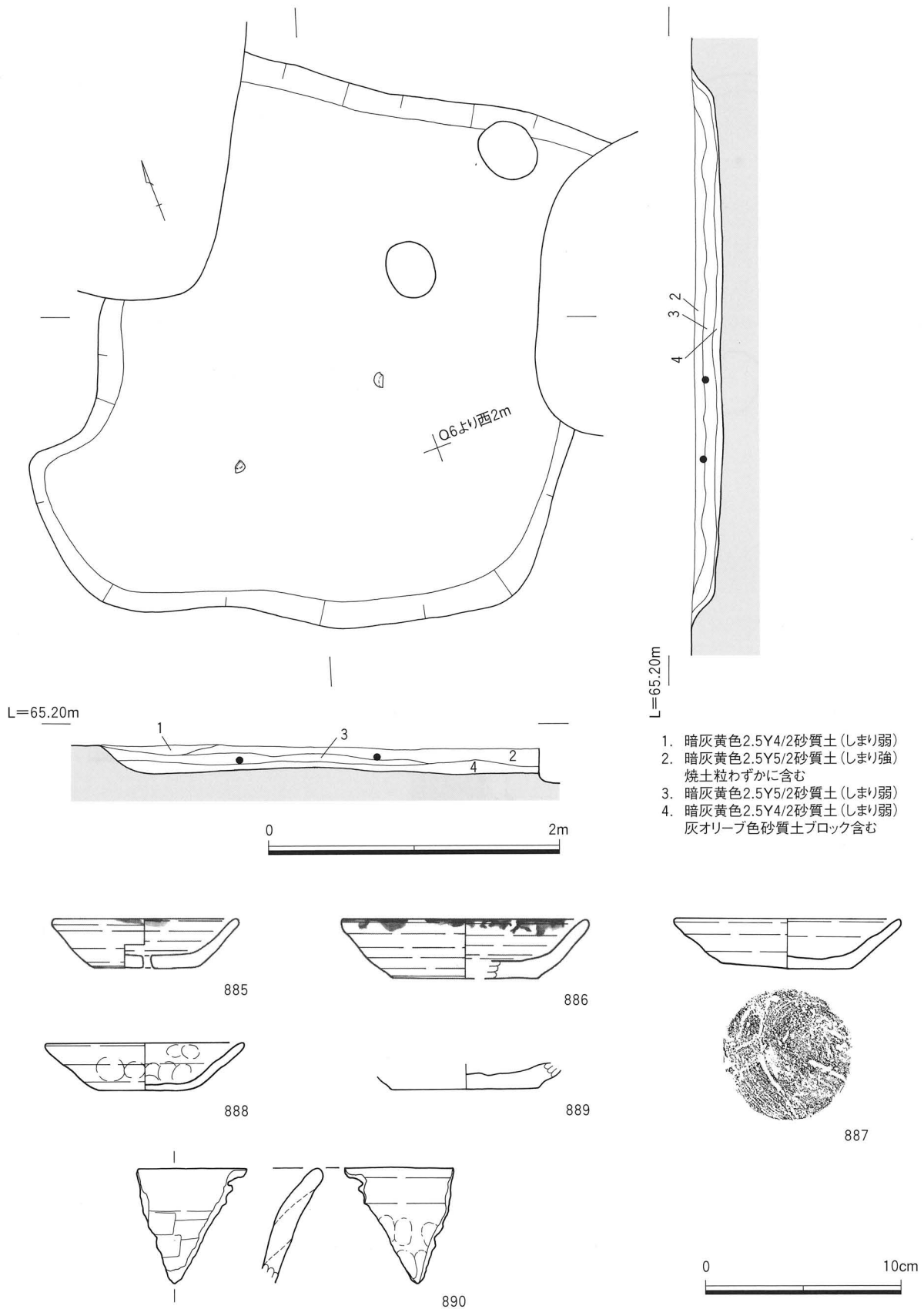
遺構の年代は、概ね16世紀代と考えられる。

不明遺構 6号（Ⅲ地区 SX1006）（第521図）

Ⅲ-3区東部中央、Q・R5グリッドに位置する、長軸600cm短軸180cm深さ26cmを測る不整な隅丸長方形の浅い落ち込み。断面は浅い逆台形状または皿状で、埋土は3層に分層。



第521図 Ⅲ地区SX1006遺構・遺物実測図



第522図 Ⅲ地区SX1007遺構・遺物実測図

遺物は須恵器杯、土師質土器片・杯・皿・羽釜、備前陶器播鉢、染付皿、磁器片、近世染付皿、鉄製品片、鉄釘が出土。882は銅銭で、皇宋通寶の真書体。北宋銭で、1039年初鑄。883は土師質土器皿。底部外面に回転糸切り痕を残す。胎土に結晶片岩とみられる粒子、および径4mmを測る褐灰色のスラグ状粒子を含む。884は備前焼陶器播鉢の下半部。中世末頃と考えられる。

遺構の年代は、出土遺物から中世末～近世初頭頃と考えられる。

不明遺構7号（Ⅲ地区 SX1007）（第522図）

Ⅲ-3区東部南寄り、P・Q5グリッドに位置する、長軸384cm短軸374cm深さ20cmを測る不整形の浅い落ち込み。断面は浅い逆台形状で、埋土は4層に分層。

遺物は須恵器杯、土師質土器片・杯・灯明皿・煮炊具（格子タタキ）・鍋・羽釜、瓦器椀、陶器甕、近世陶器片（肥前系）、鉄製品片が出土。

885～887は土師質土器皿で、底部外面に回転糸切り痕を残す。885・886は口縁に煤またはタール状物質が付着することから、灯明皿と認められる。885は底部中央に外面からの焼成後穿孔あり。888は土師質土器皿で、体部内外面に指頭圧痕を残す。底部外面に静止糸切り痕を残す。胎土に砂岩を含む。889は土師質土器杯の底部。回転台成形であるが、摩耗により切り離し痕不明。890は土師質土器鍋の口縁部片。体部内面に横位の板ナデ、体部外面に指頭圧痕を残す。器高の低い焙烙形の器形と考えられる。

遺構の年代は、出土遺物に時期幅があるが概ね中世末～近世初頭と考えられる。

小穴95号（Ⅲ地区 SP1095）（第523図）

Ⅲ-3区西部北端、D18グリッドに位置する、径50cm深度14cmを測る円形の小穴。出土遺物は1点のみで、891は須恵器蓋。天井部中央を欠く。8世紀代か。

小穴105号（Ⅲ地区 SP1105）（第524図）

Ⅲ-3区西部北寄り、D16グリッドに位置する、径36cm深度34cmを測る楕円形の小穴。

遺物は須恵質土器椀、銭貨が出土。892～896は銅銭で、いずれも北宋銭。892は太平通寶で976年初鑄。面に他銭の密着痕を残す。893は天聖元寶の篆書体で1023年初鑄。面に他銭の密着痕を残す。894は元豊通寶の真書体で1078年初鑄。面に他銭の密着痕を残す。895は元豊通寶の篆書体で1078年初鑄。896は皇宋通寶の真書体で1039年初鑄。背に他銭の密着痕を残す。

小穴121号（Ⅲ地区 SP1121）（第525図）

Ⅲ-3区西部南端、Q14グリッドに位置する、径44cm深度32cmを測る楕円形の小穴。遺物は瓦器椀、須恵質土器片・椀が出土。897・898は瓦器椀。断面三角形の低い高台をもつ。897は底部内面に平行ヘラミガキ暗文、898は体部内面に横位のヘラミガキを施す。897は二次被熱によってカーボン焼失し、酸化炎焼成。898は炭素吸着やや不良で、部分的に酸化炎焼成。ともに和泉型瓦器椀Ⅲ-3期に相当し、13世紀前葉の年代が与えられる。

小穴123号（Ⅲ地区 SP1123）（第526図）

Ⅲ-3区西部南端、Q15グリッドに位置する、径74cm深度46cmを測る、楕円形の小穴。遺物は土師質

土器片・杯・皿、白磁片が出土。899は土師質土器皿。底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。

小穴145号（Ⅲ地区 SP1145）（第527図）

Ⅲ－3区西部中央、T16・17グリッドに位置する、径46cm深度32cmを測る円形の小穴。遺物は土師質土器片・羽釜が出土。900は土師質土器羽釜。鏝部は退化して凸帯状で、折り曲げ技法で作る。体部外面に指頭圧痕を残し、内面は横位の板ナデを施す。15～16世紀代とみられる。

小穴168号（Ⅲ地区 SP1168）（第528図）

Ⅲ－3区中央部北側、A19グリッドに位置する、径82cm深度54cmを測る不整円形の小穴。遺物は須恵器杯、土師質土器鍋が出土。901は須恵器杯の上部。8世紀代か。

小穴182号（Ⅲ地区 SP1182）（第529図）

Ⅲ－3区中央部、S19グリッドに位置する、径74cm深度11cmを測る楕円形の小穴。出土遺物は1点のみで、902は鉄製の刀子。基部をU字形に折り曲げる。

小穴220号（Ⅲ地区 SP1220）（第530図）

Ⅲ－3区中央部、R1グリッドに位置する、径68cm深度42cmを測る不整円形の小穴。遺物は土師質土器片・皿（京都系）が出土。903は土師質土器の灯明皿。非回転台成形で、体部外面に指頭圧痕を残す。口縁端部に煤・タールが付着。胎土に砂岩を含む。京都系土師器皿で、在地生産品である。遺構の年代は、出土遺物から中世末～近世初頭と考えられる。

小穴238号（Ⅲ地区 SP1238）（第531図）

Ⅲ－3区中央部南側、P1グリッドに位置する、径42cm深度32cmを測る円形の小穴。遺物は土師質土器片・皿・煮炊具、瓦器椀が出土。904は土師質土器皿。回転台成形で、底部外面は回転糸切り痕を残すとみられるが不明瞭。遺構の年代は、出土遺物から概ね13世紀頃とみられる。

小穴240号（Ⅲ地区 SP1240）（第532図）

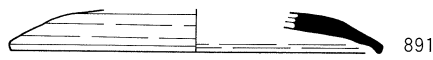
Ⅲ－3区中央部南端、P1グリッドに位置する、径54cm深度30cmを測る不整円形の小穴。遺物は黒色土器A類、土師質土器片、瓦器椀が出土。905は瓦器椀の上半部。体部内面に横位のヘラミガキを施す。炭素吸着やや不良。和泉型瓦器椀Ⅲ－3期に相当し、13世紀前葉の年代が与えられる。

小穴241号（Ⅲ地区 SP1241）（第533図）

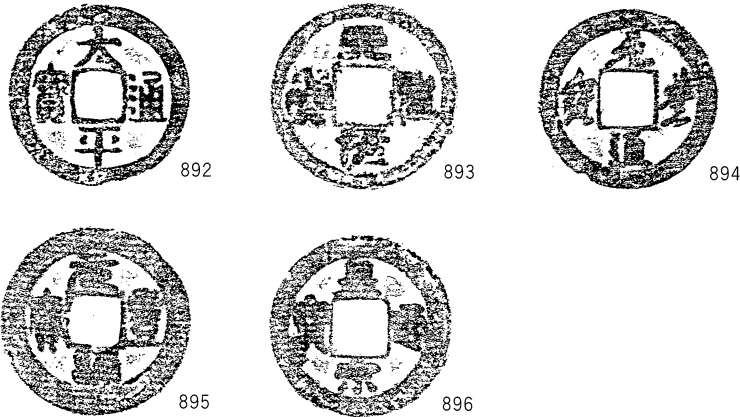
Ⅲ－3区中央部南端、P1グリッドに位置する、径32cm深度28cmを測る不整円形の小穴。遺物は土師質土器片、瓦器椀、近世陶器皿が出土。906は肥前系陶器皿の上半部。白泥を掛ける。17世紀前半。

小穴247号（Ⅲ地区 SP1247）（第534図）

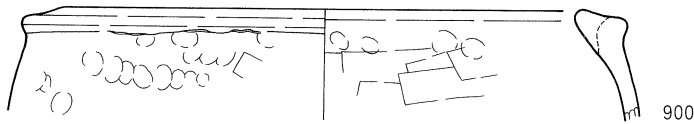
Ⅲ－3区中央部南端、O1グリッドに位置する、径44cm深度40cmを測る円形の小穴。断面はU字状で、土層は2層。遺物は土師質土器杯・皿・煮炊具・鍋・羽釜、瓦器椀、青磁碗、鉄楔が出土。



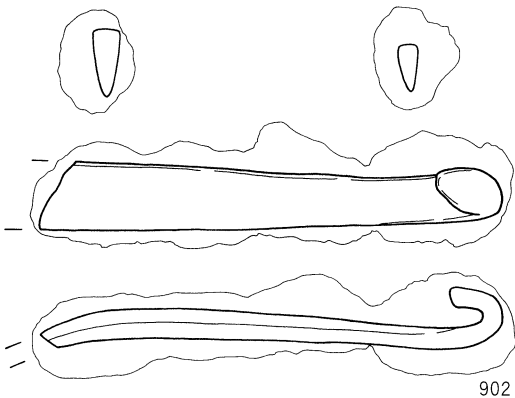
第523図 Ⅲ地区SP1095遺物実測図



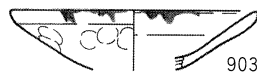
第524図 Ⅲ地区SP1105遺物実測図



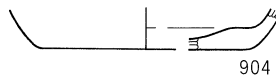
第527図 Ⅲ地区SP1145遺物実測図



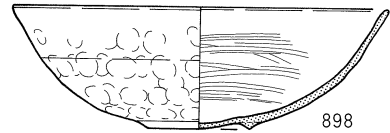
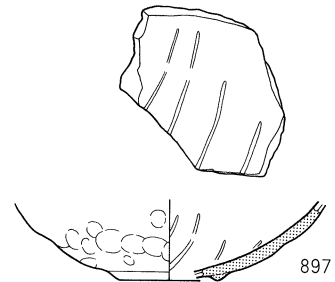
第529図 Ⅲ地区
SP1182遺物実測図



第530図 Ⅲ地区
SP1220遺物実測図



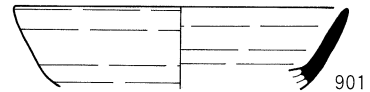
第531図 Ⅲ地区
SP1238遺物実測図



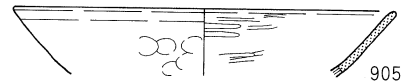
第525図 Ⅲ地区
SP1121遺物実測図



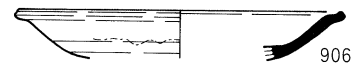
第526図 Ⅲ地区
SP1123遺物実測図



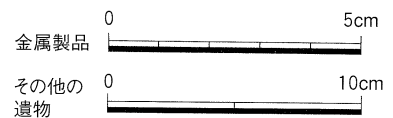
第528図 Ⅲ地区
SP1168遺物実測図



第532図 Ⅲ地区
SP1240遺物実測図

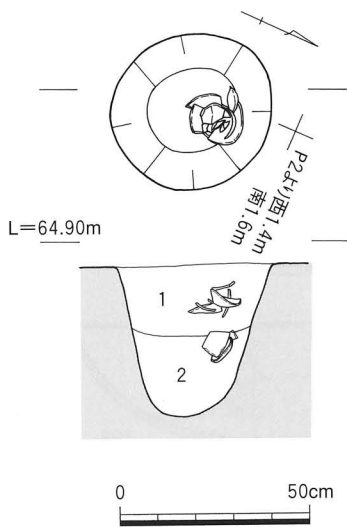


第533図 Ⅲ地区
SP1241遺物実測図

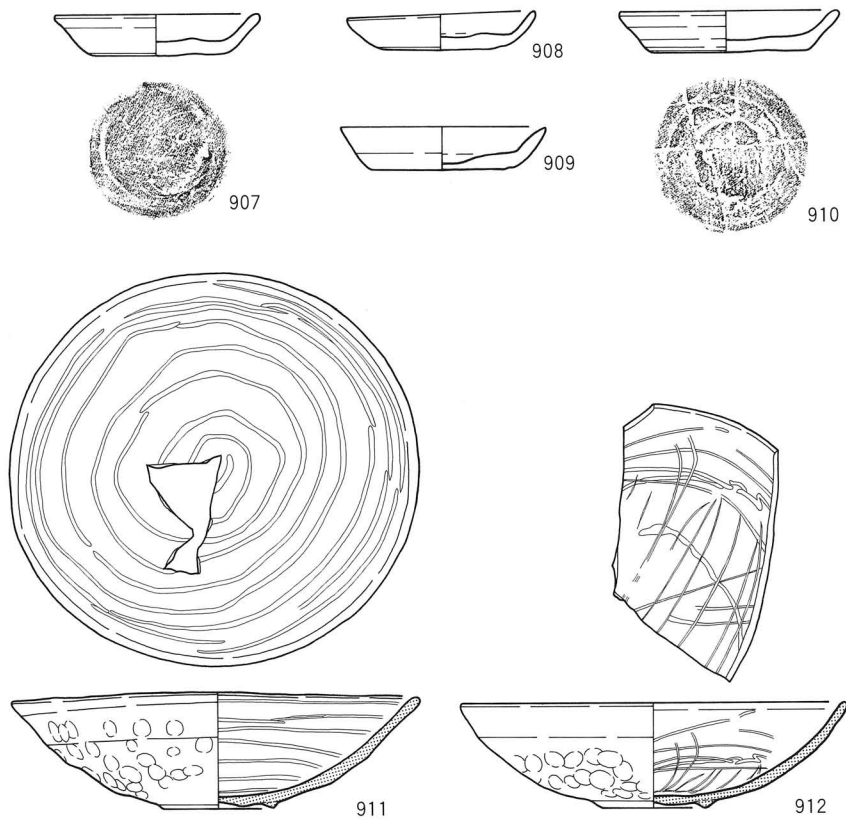


907～910は回転台成形の土師質土器皿。907～909は底部外面に回転糸切り痕のち板目痕を残す。910は底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。911・912は瓦器椀。911は内面に螺旋状ヘラミガキ暗文を施す。912は体部内面に粗い横位のヘラミガキ、底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。ともに和泉型瓦器椀Ⅲ-3期に相当し、13世紀前葉の年代が与えられる。

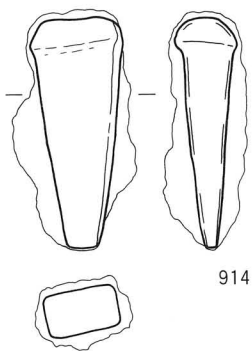
913は土師質土器羽釜。小片のため径・傾きとも不正確。鏝部は貼り付けで、断面三角形状を呈し端部は鋭く尖る。口縁端部は方形に作る。胎土に結晶片岩を含む。



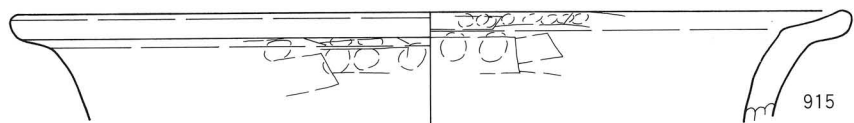
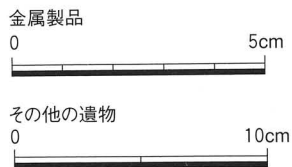
- 1. オリーブ褐色2.5Y4/6砂質土(しまり強)
- 2. オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土(しまり強)



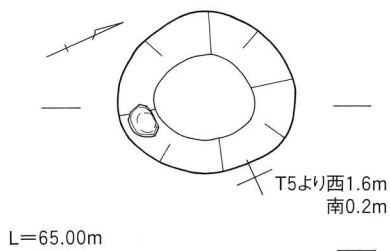
第534図 Ⅲ地区SP1247遺構・遺物実測図



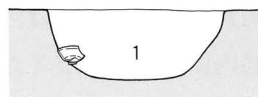
第535図 Ⅲ地区
SP1280遺物実測図



第536図 Ⅲ地区SP1288遺物実測図



- 1. オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土(しまり強)
灰オリーブ色砂質土ブロック含む



第537図 Ⅲ地区SP1294遺構・遺物実測図

遺構の年代は、出土遺物からと考えられる。

小穴280号（Ⅲ地区 SP1280）（第535図）

Ⅲ－3区東部中央、Q12・13グリッドに位置する、径58cm深度12cmを測る楕円形の小穴。遺物は土師質土器片、鉄楔が出土。914は鉄楔。頭頂部は丸く作り、端部は細る。

小穴288号（Ⅲ地区 SP1288）（第536図）

Ⅲ－3区東部南側、O3グリッドに位置する、径72cm深度7cmを測る楕円形の小穴。遺物は土師質土器杯・煮炊具が出土。915は土師質土器鍋の上半部。内外面にユビオサエのち横位の板ナデを施す。胎土は粗く、結晶片岩を含む。

小穴294号（Ⅲ地区 SP1294）（第537図）

Ⅲ－3区東部北側、S4グリッドに位置する、径48cm深度19cmを測る円形の小穴。出土遺物は1点のみで、916は龍泉窯系青磁碗。径9.0cmの小型品で、体部外面にヘラ片彫による蓮弁文を施文する。畳付の釉は削り取る。上田分類B－Ⅱ－a類に相当し、14世紀後葉～15世紀前葉の年代が与えられる。

小穴296号（Ⅲ地区 SP1296）（第538図）

Ⅲ－3区東部北側、S5グリッドに位置する、径40cm深度16cmを測る円形の小穴。出土遺物は1点のみで、917は須恵器蓋。天井部中央を欠く。胎土は粗く、焼成不良で酸化炎焼成。概ね8～9世紀代か。

小穴315号（Ⅲ地区 SP1315）（第539図）

Ⅲ－3区東部北側、T6グリッドに位置する、径80cm深度30cmを測る楕円形の小穴。遺物は土師質土器杯・煮炊具・羽釜が出土。918は土師質土器羽釜。鏝部は低平な凸帯状で、折り曲げ技法で作る。内外面ユビオサエのち横位の板ナデを施す。

小穴326号（Ⅲ地区 SP1326）（第540図）

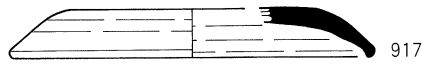
Ⅲ－3区東部中央、R5グリッドに位置する、径44cm深度26cmを測る楕円形の小穴。出土遺物は1点のみで、919は肥前系の染付小坏。肥前系で17世紀代とみられる。

小穴356号（Ⅲ地区 SP1356）（第541図）

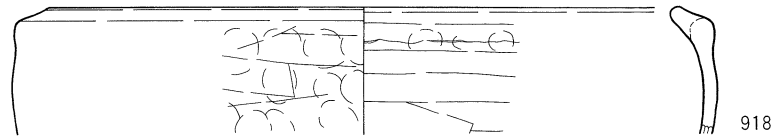
Ⅲ－3区東部南側、O5グリッドに位置する、径66cm深度47cmを測る楕円形の小穴。遺物は土師質土器片・播鉢・羽釜が出土。920は土師質土器羽釜の上部。鏝部は折り曲げ技法で作る。内面は横位の板ナデを施す。921は土師質土器播鉢の上半部。口縁端部は内上方に拡張する。体部内面にヨコハケのち播目を施す。遺構の年代は、出土遺物から概ね15世紀頃と考えられる。

小穴388号（Ⅲ地区 SP1388）（第542図）

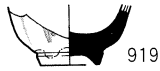
Ⅲ－3区東部中央、Q7グリッドに位置する、径50cm深度10cmを測る円形の小穴。出土遺物は1点のみで、922は土師質土器杯で、底部外面に回転糸切り痕を残す。概ね13世紀前後とみられる。



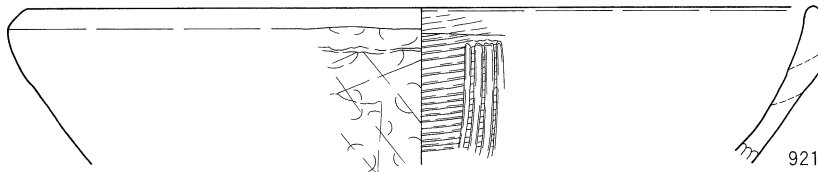
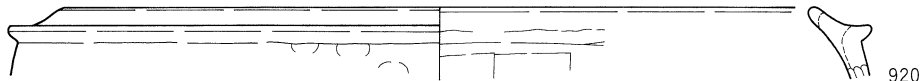
第538図 Ⅲ地区
SP1296遺物実測図



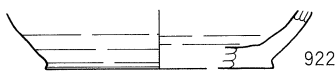
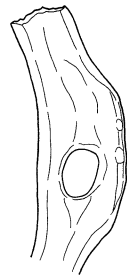
第539図 Ⅲ地区SP1315遺物実測図



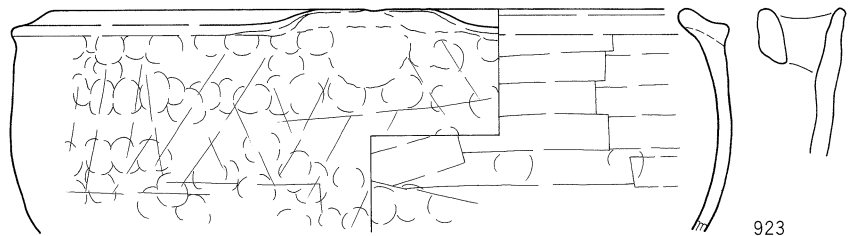
第540図 Ⅲ地区
SP1326遺物実測図



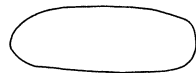
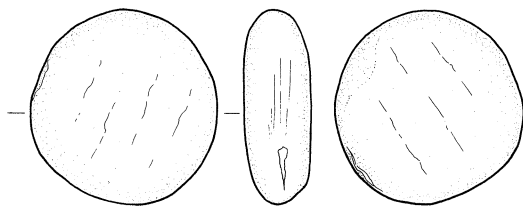
第541図 Ⅲ地区SP1356遺物実測図



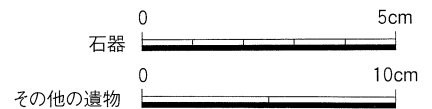
第542図 Ⅲ地区
SP1388遺物実測図



第543図 Ⅲ地区SP1411遺物実測図



第544図 Ⅲ地区SP1443遺物実測図



小穴411号（Ⅲ地区 SP1411）（第543図）

Ⅲ-3区東部南寄り、P7グリッドに位置する、径44cm深度24cmを測る不整円形の小穴。出土遺物は1点のみで、923は土師質土器羽釜。口縁と鏝部を被せ技法で作る。鏝部は短く退化し、低い凸帯状を呈する。口縁・鏝部の間に焼成前穿孔を施し、外側の鏝部を拡張して把手部を作る。体部外面にユビオサエのち板ナデ、内面に横位の板ナデを施す。概ね15～16世紀代とみられる。

小穴443号（Ⅲ地区 SP1443）（第544図）

Ⅲ－3区東端部南側、M7グリッドに位置する、径44cm深度16cmを測る不整円形の小穴。遺物は土師器煮炊具、土師質土器片、結晶片岩製円礫が出土。924は結晶片岩製円礫。径3.9cmの扁平な自然礫で、側面の一部に擦痕が確認できるが、人為的なものかは不明。

自然流路1号（Ⅲ地区 SR1001）（第545図）

Ⅲ－3区東部北端、R～C1～9グリッドに位置し、北は調査区外に延び、西はⅣ－1区に続く。Ⅲ地区での検出長44.5m検出幅496cm深度66cmを測る。底面は北に向けて緩やかに落ち込み、埋土は細砂で構成される。この細砂は、Ⅲ－3区以東の調査区北側における低い部分で第1遺構面を覆う洪水砂層とほぼ同質。自然流路として検出したが、吉野川に向けて下がる落ち込みの可能性がある。

遺物は土師質土器皿・煮炊具・羽釜、備前焼陶器壺、錢貨、角礫凝灰岩製石臼（上臼）、砂岩製石臼（上臼）が出土。925は土師質土器皿の底部。底部外面に静止糸切り痕を残す。胎土に結晶片岩と砂岩を含むとみられる。926は土師質土器羽釜。口縁と鐳部を被せ技法で作る。鐳端部は低い凸帯状。内外面にユビオサエのち板ナデを施す。927は備前焼の陶器壺。体部上半に櫛描波状文を施文。

928は銅錢の永楽通寶。明朝錢で、1408年初鑄。

929は角礫凝灰岩製は石臼（上臼）。天霧産の石材を使用。下面中央に芯棒受け孔、側面に一對の横打ち込み孔を有する。下面は凹面状に作り、摩耗著しく溝目は確認できず、横打ち込み孔が露出。930は砂岩製石臼（上臼）。供給孔が貫通し、下面中央に芯棒受け孔あり。側面に一對の横打ち込み孔を有するが、一方は摩耗によって下面に露出。下面はわずかに凹面状で、摩耗により溝目不明瞭。

遺構の年代は、出土遺物から概ね中世末期と考えられる。

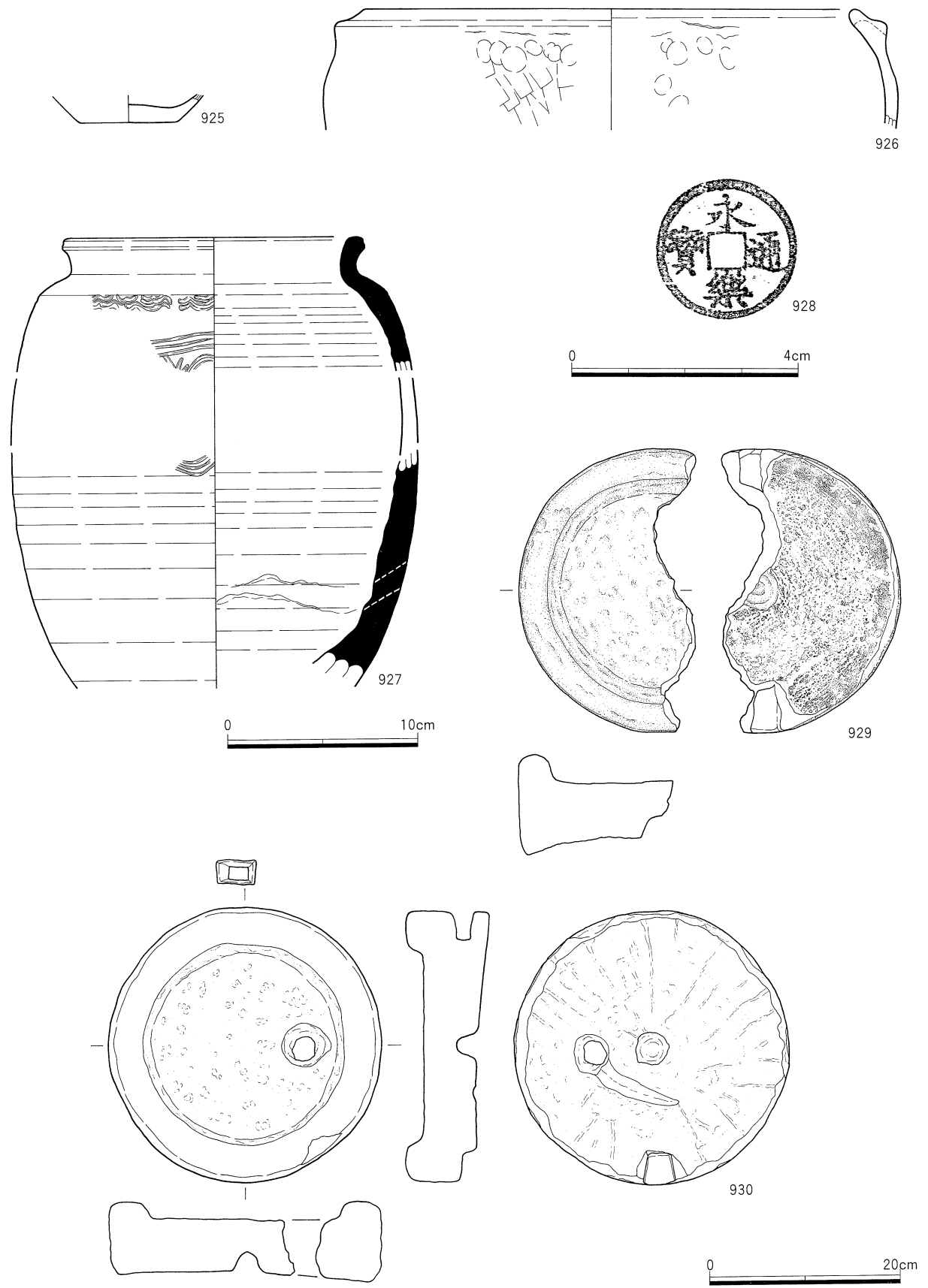
〈Ⅲ地区 第1包含層出土遺物〉（第546～549図）

931・932は土師質土器皿。底部外面に回転糸切り痕を残す。内面にわずかな煤の付着がみられ、灯明皿の可能性もある。933は土師質土器の円盤状高台付の供膳具で皿か杯とみられる。底部外面に回転糸切り痕を残す。胎土に結晶片岩を含む。やや軟質焼成。934は土師質土器高台付碗の底部。935はやや深みがある土師質土器皿。底部外面に回転糸切り痕を残す。口縁端部の2ヶ所をはさんでわずかに内側に絞る。936は土師質土器杯。底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。

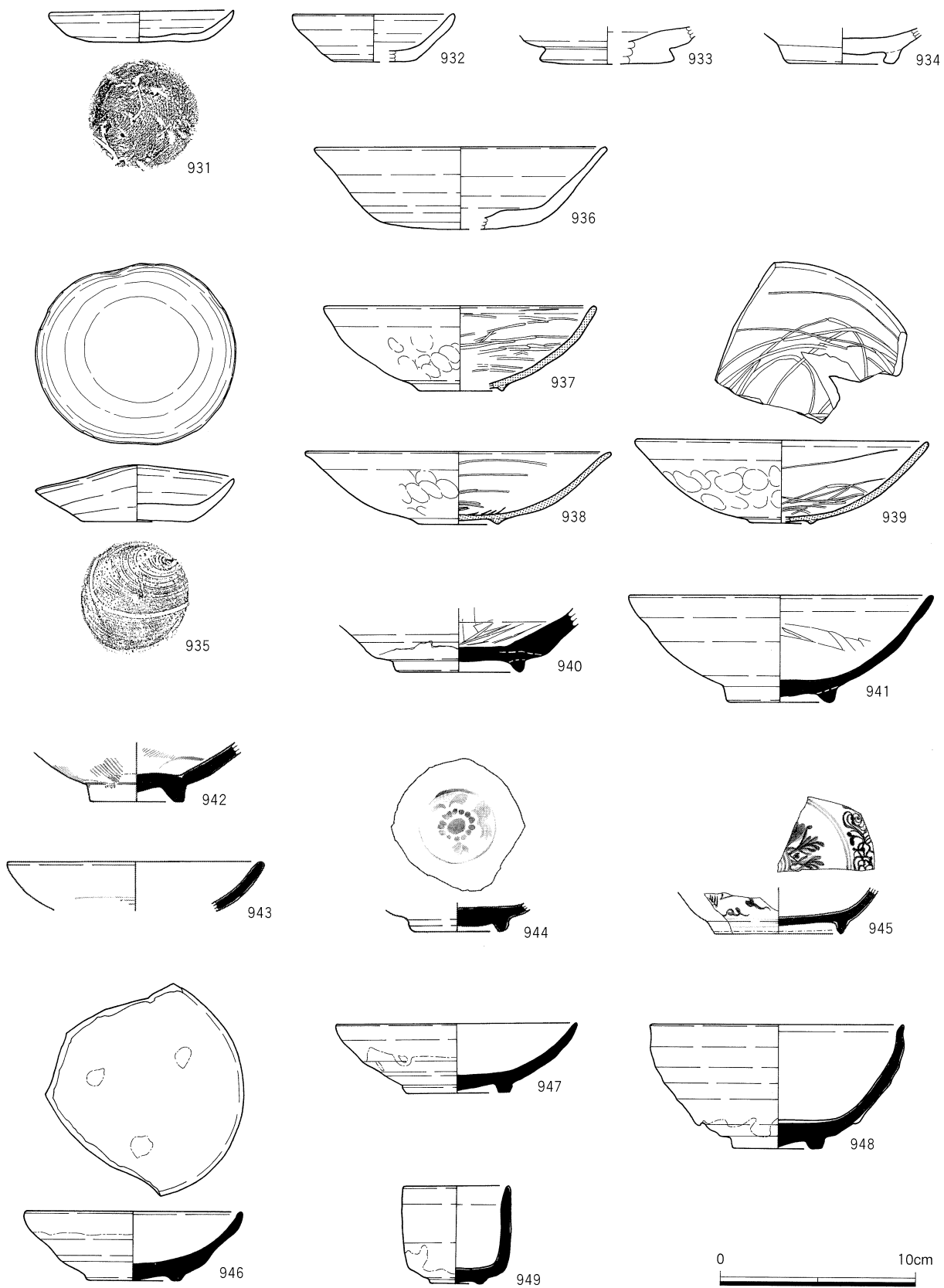
937～939は瓦器碗。ともに体部内面に粗い横位のヘラミガキを施し、底部内面に938は平行ヘラミガキ暗文、939は螺旋状ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着は良好で、939は酸化炎焼成気味である。いずれも和泉型瓦器碗Ⅲ－3期とみられ、13世紀前葉の年代が与えられる。

940・941は西村系の須恵質土器碗。940は下半部のみで、体部の器壁が厚い。内面に板ナデを施し、ヘラ端部の圧痕が斜状に残る。941は底部外面に回転ヘラ切り痕を残し、のち高台貼り付け。体部内面に斜位の板ナデを施す。胎土は粗く結晶片岩を含む。焼成不良で、胎土は黒化、外面の一部に炭素が付着。内外面に重焼の痕跡を伴う。ともに佐藤編年5期とみられ13世紀前半の年代が与えられる。

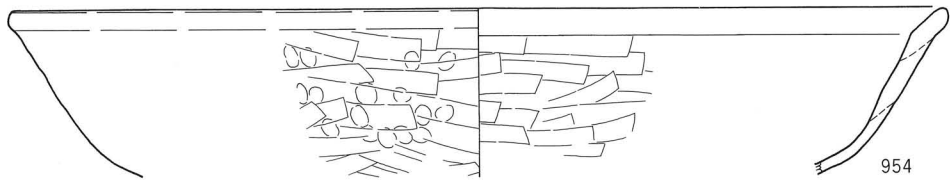
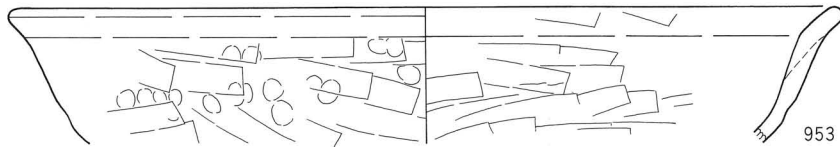
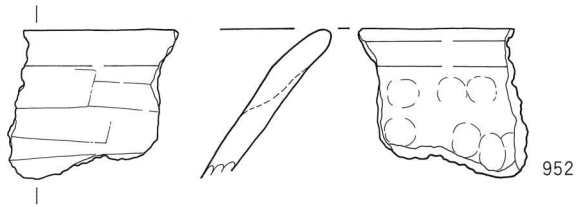
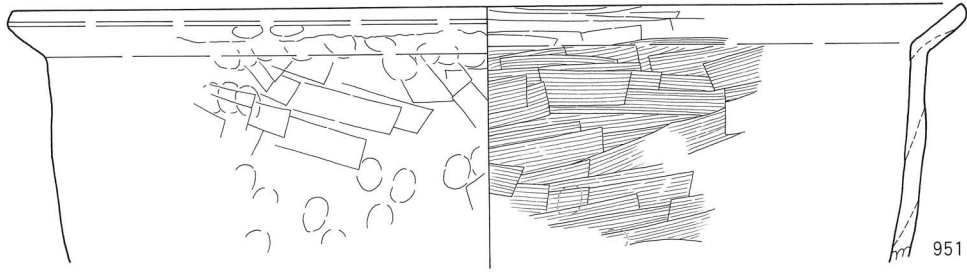
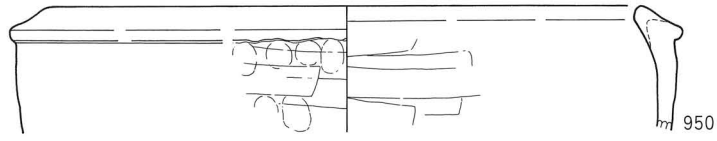
942は青磁碗の下半部。体部内外面に櫛描文を施文する。大宰府分類の同安窯系青磁碗Ⅰ－1b類に相当し、12世紀中頃～後半の年代が与えられる。943・944は青磁皿。943は上部片で、黄みがかった釉を施す。944は底部片で、内面に印花文をスタンプする。底部外面の釉を掻き取る。透明度の高い釉で、



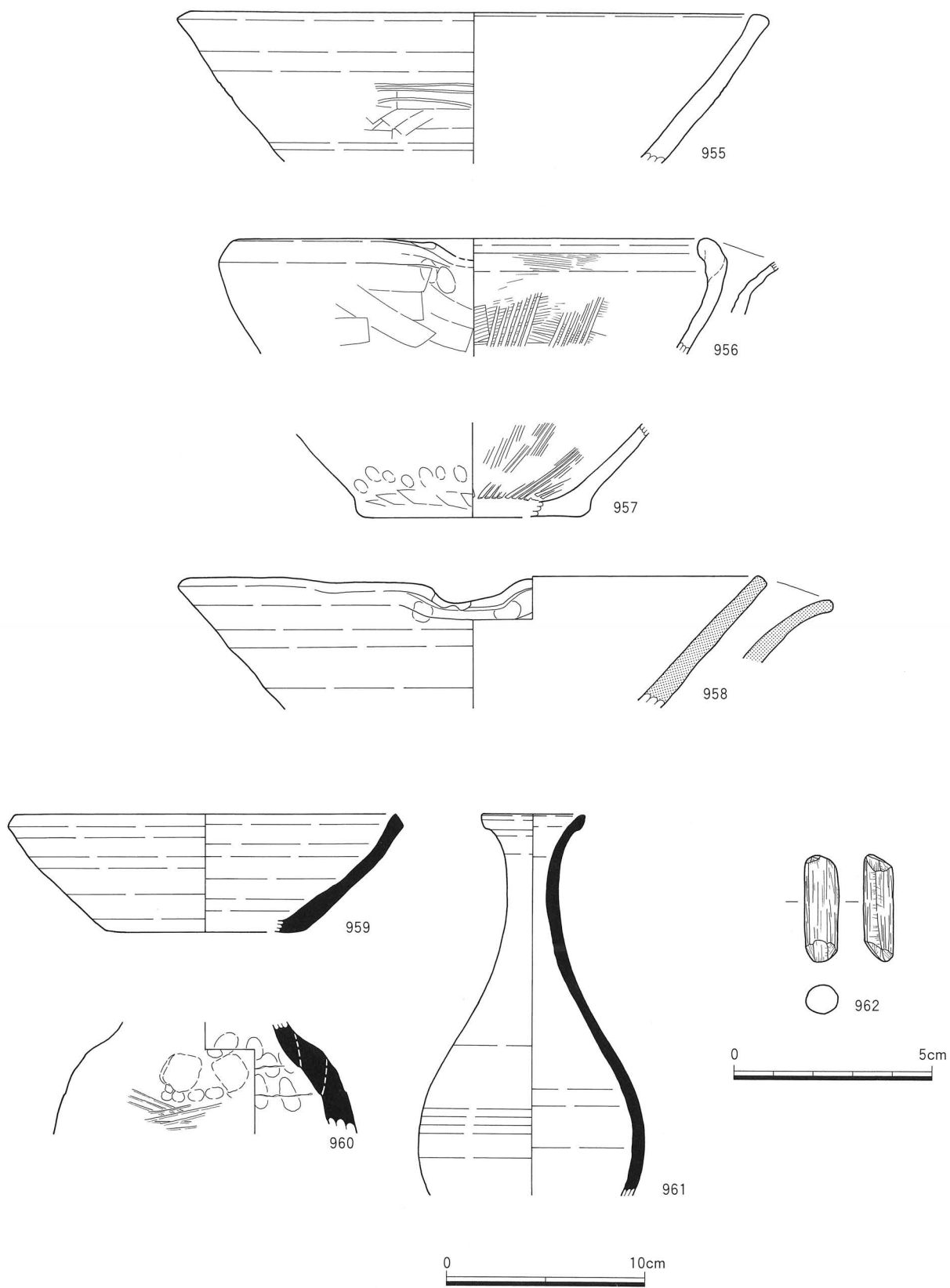
第545图 Ⅲ地区SR1001遺物実測図



第546图 Ⅲ地区第1包含層遺物実測図(1)



第547图 Ⅲ地区第1包含層遺物実測図(2)



第548图 Ⅲ地区第1包含層遺物実測図(3)

貫入を伴う。素地は陶器質。腰折れの器形をもつ皿とみられ、15世紀前後とみられる。945は染付皿の下半部。体部外面に唐草文、内面に花文を絵付けする。破面に黒褐色の付着物があり、補修に用いた漆の可能性もある。小野分類の染付皿 B 1 群Ⅶ類とみられ、15世紀後半～16世紀前半の年代が与えられる。

946・947は肥前系の陶器皿。底部内面に胎土目痕を残す。17世紀代とみられる。948は瀬戸美濃系陶器の天目茶碗。鉄釉を施す。949は陶器猪口。肥前系とみられる。

950は土師質土器羽釜の上半部。鏝部は短く、折り曲げ技法で作る。体部外面に指頭圧痕のち横位の板ナデを施し、内面は横位の板ナデとして図示しているが目の細かいハケである。胎土に金雲母が目立つ。15世紀頃か。

951～954は土師質土器鍋。951は深みのある器形で、体部内面にヨコハケを施す。胎土に結晶片岩を含む。952～954は浅い焙烙形の器形で、ともに頸部内面に稜を作る。外面は指頭圧痕を残し、のち板ナデ、内面は横位の板ナデを施す。953は胎土に結晶片岩を含む。中世末期とみられる。

955～957は土師質土器捏鉢。955は口縁は肥厚しない。体部外面に板ナデを施し、のち中位に横方向の沈線が3条確認できる。内外面に炭素が付着し、重焼痕を伴う。口縁の形状から東播系の焼成不良品ではない。956は大きく内彎する口縁をもち、片口を有する。体部内面にヨコハケのち播目を施す。957は下半部で、内面は使用により調整不明瞭。956・957は概ね15～16世紀代とみられる。

958は瓦質土器捏鉢。端部は方形に作り、片口を設ける。炭素吸着は良好で、胎土に結晶片岩を含む。

959は東播系の須恵質土器捏鉢。口縁端部は未発達である。内外面にわずかに炭素付着し、体部外面に重焼痕を伴う。森田編年第Ⅰ期第2段階前後とみられ、12世紀前後の年代が与えられる。

960は須恵質土器四耳壺の体部上位。体部外面に平行タタキのちナデを施し、肩部に耳部の剥離痕を残す。器壁は厚い。胎土に結晶片岩を含む。軟質焼成である。

961は備前焼陶器の鶴首徳利。頸部内面に絞り痕あり、肩部に自然釉付着。近世である。

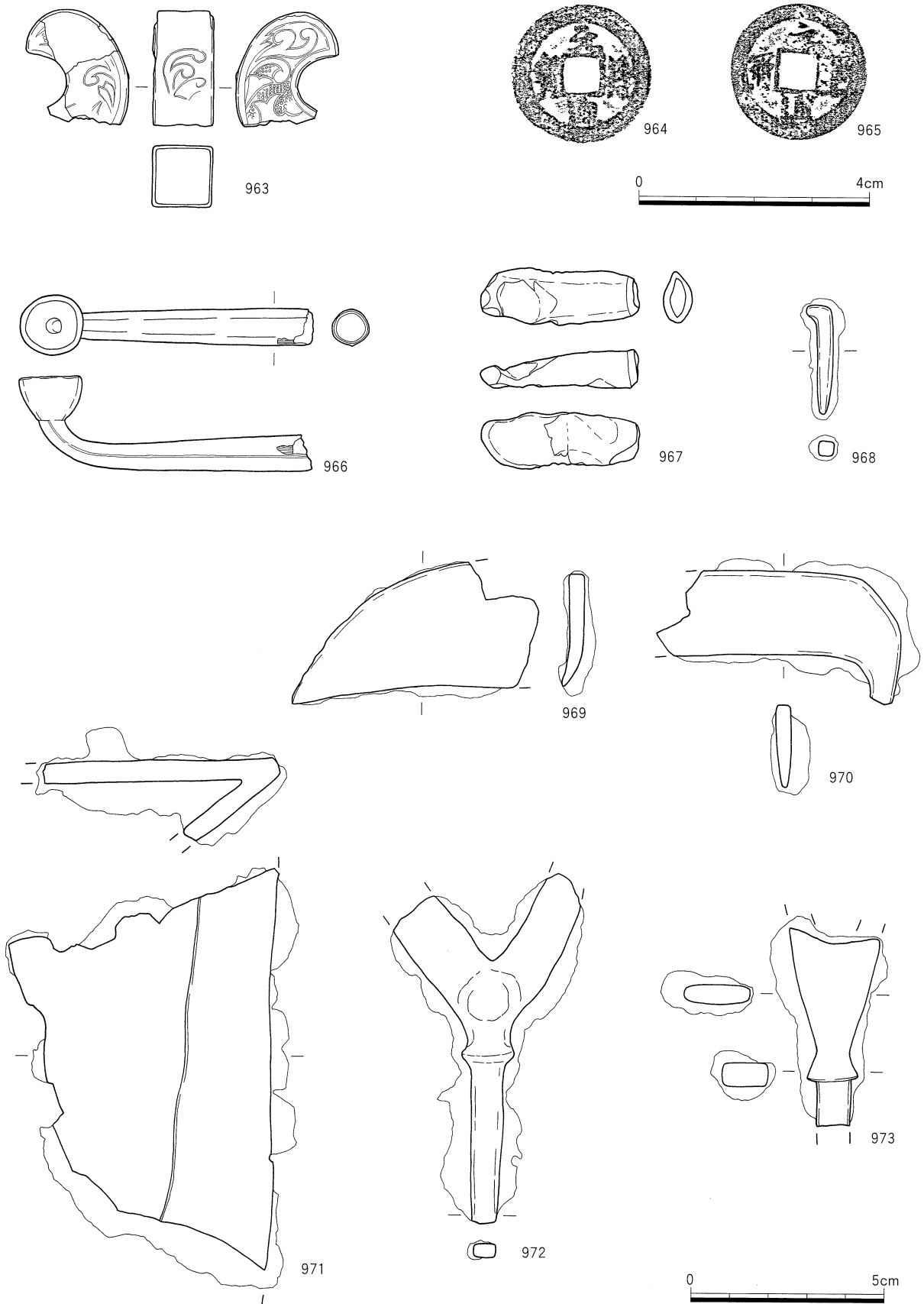
962は滑石製の石墨。側面は研削により断面多角形状を呈する。両端は使用により鈍く尖る。

963は青銅製の蕨手状飾金具。C字形を呈し、表面に蕨手文様を陰刻し、地に魚子文を打刻する。のち渡金され、部分的に残存。鏡台の受け部や柱の端部に装着される飾り金具で、県内では徳島城下町遺跡で類例がある（徳島市教育委員会2003）。17世紀前半頃とみられる。Ⅲ－3区中央北側の SA1001・1007・SX1001付近の遺構面直上から出土しており、これら遺構との関連性が窺われる。

964・965は銅銭で、ともに北宋銭。964は元符通寶の真書体で、1098年初鑄。965は元豊通寶の真書体で、1078年初鑄。

966は青銅製煙管の雁首。管内に木質部残存。967は青銅製煙管の吸口。部分的に変形。

968は鉄釘。全長2.8cmでほぼ完形。頭部はL字に折り曲げて作る。969は鎌の先端部とみられる鉄製品。970は鉄製の鎌。971は鉄製の鋤先。972は鉄鍬。Y字形の形状をもつ雁又鍬である。973は鉄鍬。雁又鍬とみられる。



第549图 Ⅲ地区第1包含層遺物実測図(4)

報 告 書 抄 録

ふりがな	すえいしいせき なかしょうひがしいせき							
書名	末石遺跡 中庄東遺跡							
副書名	加茂第一地区堤防の事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	徳島県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第74集							
編著者名	島田豊彰・辻 佳伸・白石 純・辻本裕也・三奈木義博							
編集機関	財団法人 徳島県埋蔵文化財センター							
所在地	〒779-0108 徳島県板野郡板野町犬伏字平山86番2 TEL 088-672-4545							
発行年月日	平成21年3月31日							
所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
すえいしいせき 末石遺跡	とくしまけん み 徳島県三 よしぐんひがし 好郡東み よし町西 しょうあざすえいし 庄字末石	36489		34°02'39"	133°56'45"	平成11年度	5,990m ²	加茂第一 地区堤防 の事業に 伴う埋蔵 文化財発 掘調査
なかしょうひがし 中庄東遺跡	とくしまけん み 徳島県三 よしぐんひがし 好郡東み よし町中 しょう 庄	36489	489-61	34°02'22"	133°57'20"	平成12年度 平成13年度 平成14年度 平成15年度	4,759m ² 3,847m ² 27,997m ² 23,624m ²	
所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
末石遺跡	集落	弥生時代 飛鳥時代 奈良時代 平安時代 鎌倉時代 室町時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 柵列 土坑・土墳墓 溝 不明遺構 柱穴・小穴 自然流路	弥生土器・土師器・黒色土器・須恵器・土師質土器・須恵質土器・瓦器・国内産陶磁器・輸入陶磁器・石器・石製品		7世紀後半頃の竪穴住居跡5棟を検出。中庄東遺跡の調査結果と併せると、三加茂平野部に数棟～十数棟の小群で集落が点在する景観が復元できる。		
中庄東遺跡	集落	弥生時代 飛鳥時代 奈良時代 平安時代 鎌倉時代 室町時代 江戸時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 柵列 土坑 焼土坑 土墳墓 集石遺構 区画溝 条里溝 溝 不明遺構 柱穴・小穴 自然流路	弥生土器・土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器・土師質土器・須恵質土器・瓦器・瓦質土器・国内産陶磁器（常滑・備前・瀬戸美濃・肥前・大谷焼）・輸入陶磁器（青磁・白磁）・溶解炉壁・土製鋳型・鉄滓・鉄製品・銅製品・銅鏡・銅製飾り金具・銅銭・石器・石製品		奈良時代の建物柱穴から正倉院所蔵の鏡と同形の花卉双蝶八花鏡が出土。過去の調査と併せ一帯が官衙である可能性が高まる。調査地西部で鎌倉時代の一町四方の規模をもつ方形屋敷地を確認。金丸荘官の屋敷地と推測できる。調査地東部では室町時代の石積み区画をもつ方形屋敷地と、同時期の鍛冶・鋳造遺構を検出。鍛冶スラグ約2ト ^ン が出土、大規模な鉄製品生産地である。		

財団法人徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第74集

末石遺跡・中庄東遺跡

— 加茂第一地区堤防の事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

《第1分冊》

発行日 平成21(2009)年3月31日

編集 財団法人 徳島県埋蔵文化財センター
〒779-0108 徳島県板野郡板野町犬伏字平山86番2
TEL (088) 672-4545 FAX (088) 672-4550

発行 徳島県教育委員会
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

印刷 徳島県教育印刷株式会社